



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	自閉症スペクトラム障害児者のライフステージを通じた仲間関係の形成に関する臨床的研究：地域ケアの視点から( 審査結果の要旨)
Author(s)	日戸,由刈
Citation	
Issue Date	2018-03-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/150888">http://hdl.handle.net/2309/150888</a>
Publisher	
Rights	

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder : ASD) 児者は、その認知特性から同世代の人との仲間関係の形成は困難と考えられてきた。一方、近年の研究で、ASD 児者は、定型発達児者よりも遅れて仲間に対する社会的関心が芽生えること、ASD 児者同士だと仲間関係を築きやすいことなどが示唆されている。それらの知見をふまえ、本研究では、疫学的手法を用いて選定された ASD 児者のライフステージを通じた仲間関係の実態を調査すること、臨床実践を通して ASD の学齢児における小集団活動を通じた仲間関係の形成を促進する方略を検討すること、および、この方略をもとに地域ケア・システムを開発し効果を検証することが目的とされた。

ASD 児者の仲間関係に関する長期のフォローアップ調査は世界的にみても知見が非常に少なく、独創性のある研究といえる。発達障害者の生涯発達を考えると、二次障害による精神的な健康の問題は深刻であり、それを予防するための方向性を示し、支援法を開発して臨床実践の現場でその効果を検証した点において意義の大きい研究である。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

日戸氏が心理士として勤務する療育施設は発達障害に対する地域ケア・システムが構築された自治体に設置されている。その地域では発達障害児に対する早期発見・早期療育システムが構築され、エリア内に居住する ASD 児のほとんどが幼児期のうちに発見され療育の対象となり、成人期以降まで継続的なフォローが行われている。本論文は、そのような地域ベースでの長期的なフォローアップが可能な体制の中で行われた発達支援の臨床的研究である。まず、15年間にわたる追跡調査が実施された。そして、支援技術の開発、臨床実践を通じたその効果の検証、および地域での適用が行われた。これは、アメリカ国立精神衛生研究所が ASD 児者に対する心理社会的な介入研究において推奨しているステップに沿ったものとなっている。

以上より、本論文で用いられている方法は研究目的に合致したものであり、当該学問分野において妥当なものであると評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文は、国内・国外の関連する文献がレビューされ、それらの知見をふまえて研究が構想されている。そして、地域ケア・システムの構築された地域において、疫学的手法を用いて偏りなく対象が選定され、診療記録をデータとする後方視的な調査が行われた。本研究の対象者は、日戸氏の所属する施設で行われた疫学調査および追跡調査の対象の一部でもあったため、入念な情報聴取が行われ、診断評価および診療記録への記載については複数の研究者による検討が本研究に先行して行われていた。そして、対象者の担当医師とともに、診療記録に記載された内容の信頼性の検討が行われた。そのように臨床研究として妥当なデータの収集と分析がなされている。また、本研究は日戸氏が勤務する施設内の倫理委員会の許諾を得ており、研究協力者に対する倫理上の配慮も適切に行われている。

以上より、研究資料やデータの収集と分析が適切になされていると評価できる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文において、ASD 児者は定型発達児者と比べて仲間関係の発達が遅れる傾向が明らかにされた。また、ASD 児者同士の小集団への長期的な所属は、学齢後期の仲間関係の形成のみならず、成人前期の社会的転帰に対しても良好な影響を及ぼすことが明らかとなった。一方、一般集団の中だけで過ごした ASD 児者は、定型発達者を相手に仲間関係を形成することは困難で、学齢後期に長期的な孤立のリスクが高まると考えられた。そして、葛藤場面での合意形成を促進することにポイントをおいた支援技術が考案され、その効果が検証された。さらに、それらの知見に基づき、ASD の学齢児に対して長期的に仲間関係を支援するための余暇活動支援を中心とする地域ケア・システムの開発と適用がなされ、フォローアップ調査の結果、余暇活動支援に参加した者は参加しなかった者より仲間関係が持続する率が高かったことから、余暇活動支援の効果が示唆された。同時に、ASD 児者同士の自発的な仲間関係の維持は困難であり、親などからの継続的なサポートが必要なことも示唆された。これらの考察と結論はデータから適切に導かれており妥当で、学術的な水準に達している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文では、15 年間の追跡調査と 10 年間の臨床実践から、ASD 児者の仲間関係の実態とその長期的な発達経過が明らかにされた。そして、同世代の人との対等な仲間関係をもつ体験は ASD 児者の青年期以降の不適応を予防し、社会参加を支え、成人前期の多様な社会参加や生活の質の保障につながることで、ASD 児者特有の興味関心と認知特性への配慮がなされた場面の設定と関係維持のための支援体制を有する長期的な余暇活動支援は、汎用性の高い地域ケア・システムとして機能する可能性があることが示唆された。

これらの知見は、ASD 児者の仲間関係の形成と維持、およびそれを通じた生涯発達における精神的健康の保障と生活の質の向上に寄与する点に大きな意義を有し、発達支援の領域において取得学位にふさわしい成果として認められる。

以上の点を総合的に評価し、審査委員は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与に相応しい水準にあり、合格と判定した。